

# 第44回 全日本中学生水の作文コンクール 和歌山県入賞作品集



古座川

和歌山県

表紙の写真『古座川』

大自然の恵み豊かな熊野の山々。

その中央に位置する大塔山を母とし、育まれた清流古座川。

熊野灘に流れ込むまでの約60 kmにわたり、古座川は豊かな表情を見せてくれます。

写真は、少女峰付近の河原。この辺りは、川底までくっきり見通せるほど、透明度が高く、夏場は川遊びをする家族連れで賑わいます。

## いあいさつ

水は、あらゆる生命の根源であり、私たちの暮らしや産業活動を支える限りある貴重な資源です。近年では、世界的な渇水や洪水が頻発し、水利用の安定性、安全で良質な水源の確保が重要な課題となっています。

こうしたことから、国においては、水を共有の財産と位置づけるとともに、健全な水循環の重要性について、国民の理解を深めるため、毎年八月一日を「水の日」と定め、様々な関連行事が行われています。

和歌山県では、この一環として、中学生を対象に、昭和五十四年から「全日本中学生水の作文コンクール」の和歌山県審査を実施しており、本年は、五五七編もの御応募をいただきました。

いずれも、「水について考える」というテーマにふさわしく、日常生活の体験から学んだことや世界の水資源問題について考察したもの、また、昨年の水管橋崩落に伴う断水の経験など、様々な視点から、水について感じたことや、水の大切さを表現したすばらしい作品ばかりでした。

これらの中から、入賞作品十八編をこのたび作品集にまとめました。家庭や学校で御活用いただき、水への関心をさらに深めていただくことを願っています。

令和四年八月二日

和歌山県企画部長 長尾 尚佳

# もくじ

## 優秀賞

打つ手は、無いのか？

和歌山県立きのかわ支援学校三年 大久保 颯人 . . . 1

断水から学んだこと

和歌山市立加太中学校 三年 重松 那津実 . . . 3

私の断水体験記

和歌山県立向陽中学校 二年 福田 純伶 . . . 5

## 入選

水の恵みを知る

和歌山県立向陽中学校 二年 内川 莉里 . . . 7

水と生きる

開智中学校 一年 奥村 侑誠 . . . 8

池の写真

和歌山県立向陽中学校 二年 小谷 咲貴 . . . 9

バーチャルウォーターと私たちの生活

和歌山県立田辺中学校 三年 辻岡 慈月 . . . 10

当たり前前に水がある幸せ

和歌山信愛中学校 二年 辻本 葵 . . . 11

美味しいをつくるために

和歌山県立向陽中学校

二年

岩橋 郁奈

・  
・  
・

12

清水大師

開智中学校

一年

大島 直樹

・  
・  
・

13

美しい水と生きていく

和歌山県立向陽中学校

二年

金田 悠那

・  
・  
・

14

水の美しさを守るために

和歌山県立向陽中学校

二年

川島 碧生

・  
・  
・

15

当たり前を大切に

和歌山県立向陽中学校

二年

木下 恵李

・  
・  
・

16

水との自然観に育まれて

和歌山県立向陽中学校

二年

串上 舞

・  
・  
・

17

水を大切に

和歌山県立向陽中学校

二年

津田 若奈

・  
・  
・

18

水との向き合い方

和歌山県立向陽中学校

二年

西上 佳楠

・  
・  
・

19

私たちの生活と水

和歌山県立向陽中学校

二年

濱ノ上 紘生

・  
・  
・

20

水はみんなのもの

和歌山県立田辺中学校

三年

和田 温時

・  
・  
・

21

(掲載順序は五十音順です。)

## 優 秀 賞

### 打つ手は、無いのか？

和歌山県立きのかわ支援学校 三年

おおくぼ はやと  
大久保 颯人

【認不足】が原因ではないかと思う。静岡の土砂崩れにしても、さまざまな『説』が言われているが、確認に加えて、もし、土の状況を分かっている人がいたのなら、「報告」を行って欲しかったものである。

静岡でのがあつてから、身近な都市・大阪でも集合住宅が潰れているのだから。

北海道の事故は、自然を軽視していた事が一番の問題点ではないだろうか。午前中は波もなく、風も強く吹いていなかったとしても自然相手、特に「海」なのだから、天候急変は予知できなかった。「予報」というヒントが出ていたし、船長も可能性を指摘していたのだから。

防災や減災、発生後の被害の最小化にはこれまでの「物品での備え」の他に、「自分で見る」・「指摘に従う」ことも重要ではないだろうか。そうすれば、今回の事故も防ぐことができただろう。遊覧船の会社の経営者も変わり、船長も北海道に来て日が浅いと聞いた。

さて、これは、遠い他県の一エピソードに過ぎない・・・だろうか。

僕はそうは思わないし、思えない。和歌山に大いに関係するだろう。

僕がこの作文を書くころと思ったきっかけは、近年、各地で水害が多発しているということである。例えば、昨年には和歌山市で、水道橋が崩落して断水が発生したことがあった。また、静岡・熱海では、土砂崩れが起きた。北海道では、遊覧船が沈没した。一見、「そのとき起こっただけの事」のように映るのではないだろうか。

しかし、僕は何か打つ手があつたのではないかと思う。水道橋の崩落は、ニュースで、『鳥のフンが付いていた』とか『老朽化していた』という説を聞いたが、結局、そういうことを含めて、【確

「南海トラフ巨大地震」が、今後四十年以内に発生する可能性が、【九十%以上】だという分析を、本年一月に政府が発表している。分析では、四国から近畿の太平洋側が震源域としている。そんな大きな地震が起こったらいっただれ程の被害が出るのか。実は「南海トラフ地震」の発生が今回だけでないことから、【水】の視点で調べてみた。材料としたのは一九四六年十二月二十一日の「昭和南海トラフ」である。最大震度は六。高知県・徳島県・和歌山県を中心とした被害で、家屋流失千四百五十二戸に上る。特に、高知県・三重県・徳島県で津波が四・六メートルに到達したという。

これに対し、発生が予想される南海トラフの被害予想は、最大震度七。津波は最大三十メートルを超えるという予測が。また、震源の位置が海に近いことから、地震発生から津波到達までの時間が非常に短いともいわれている。

僕は、実は車椅子を使用している。自分でできることは多いが、やはり行動には時間がかかってしまう。みなさんはこんな時、どうするだろう。

- ・ 次の日、友達との約束がある時
- ・ 公共交通機関を使って外出する時
- ・ 天気予報で「雨が降りそうだ」という時

友達との約束に遅れないよう、早めに外出しよう、とか、混雑する時間を避けよう、とか、傘を持って行こう、とか考えるだろう。旅行に行くなら、何ヶ月も前から計画するだろう。みなさんは、その時その時、臨機応変に動けば済むだろうが、僕はその迅速さには限界がある。だからこそ、天気予報を含めていろいろ調べて準備をして外出する。あまり人と接するのは得意ではないので、入念に。

行政が行動するのは、なにか事が起こってからである。旅行の準備くらい丁寧な、そして、慎重に、災害時の被害防止に取り組んで欲しい。発生後の対策の前に、防止対策を。

## 優 秀 賞

# 断水から学んだこと

和歌山市立加太中学校 三年

しげまつ なつみ  
重松 那津実

私たちの生活に欠かせない水。私たちはいつでも不自由なく、綺麗でおいしい水を使用できる環境にいます。去年、この環境にあらためて感謝する出来事が起こりました。

令和三年十月三日、六十谷水管橋の一部が崩落し和歌山市北部地域で大規模な断水が発生。市内の四割にも当たる約六万戸に影響が出ました。私の自宅も対象の地域となり、初めて長期間の断水を経験することとなりました。幸い、私の地域は少し遅れての断水となったので、時間の余裕がありました。母はその間にお風呂に水を溜めたり、麦茶をたくさん沸かしたり、たくさんのお米

を炊いて冷凍するなどの準備をしていました。私は手伝いながら、こんなに準備をしていたら、きっと断水になっても大丈夫だろうと簡単に考えていました。

しかし、実際に断水になると予想以上に不便さを感じました。まず飲料水は十分に用意していても、生活用水が全然足りません。ご飯を作って食べることはできるけど、使った食器を洗うにも水がたくさん必要です。トイレを流すには、お風呂に溜めておいた水をバケツに汲んで勢いよく流さないと流れないし、洗濯機は回せません。顔を洗う時は、洗面所に置いたタンクからの水が、いつもとは違う角度から入ることに苦戦し、勢いもないので態勢がきつかったです。一番大変なのは水を運ぶ作業です。空のタンクに水を汲んできて家に運び入れる作業は、重たくて本当に大変でした。

私を含め多くの人が、蛇口から水が出るのがあまりにも当たり前で、その大切さを忘れかけているように思います。断水を経験したことで、自分が毎日どれだけ大量の水を使用しているかを実感し、改めて水の大切さを考えるきっかけになりました。

水は私たちの生活に欠かせない重要なものです。水の安定供給がなくなれば生命に危険が及びます。水は私たちの命を守ってくれているのです。海外に目を向けると、災害に関係なく、日常から



水の確保が難しい国がたくさんあります。それらの国では、水を手に入れることは大変な重労働です。しかし、生きていくために、命を守るために毎日水の確保をしています。全世界の人々が安定的に水を得られるシステム作りは世界の課題です。

調べてみると、日本は水の確保が難しい国々に、井戸や水道の整備で支援しています、それだけではなく、現地の住民が主体となつて施設を維持・管理できる体制を整備するなど、ハードとソフトの両面から支援しているそうです。井戸や水道を作つて終わりではなく、現地でどのように管理していくかを現地の人たちと一緒に考えていくことが大切なのです。私はこれらのことを知りませんでした。もっと知らなければいけないことが沢山あると感じました。

私はこれから大人になつて、たくさんの経験をしていく中で、自分に知識をつけて世界のためになることを考えて行動したいです。今私にできることは、節水や川や海を汚さない、地球温暖化の防止などです。一人が行動しても小さなことですが、水は限りある資源であるということを意識し、小さなことからでも行動すべきであると思います。水は、誰のものでもないみんなのものなのだから。

## 優 秀 賞

# 私の断水体験記

和歌山県立向陽中学校 二年

ふくだ すみれ  
福田 純伶

私たちの住む和歌山市は真ん中に紀ノ川があり、浄水場はすべて対岸にある。その水を運ぶ唯一の橋が崩落したのだ。私は正直焦った。頭が混乱し、不安が込み上げてくる。私はただそこに立っていた。その時、母の一言ではっと我にかえる。

「そうだ、今のうちに水をためなければいけないんだ。」震える心をなんとか落ち着かせながら私は蛇口をひねった。勢いよくジュアアーツと水が出た。「よかった、まだ水が出る。」という安堵感。

水をどんどんためていく。手分けして、容器も探す。まずはお風呂。そしてやかん、お鍋、水筒、タライ、バケツなど。それが終われば洗濯機や食洗機を回したりしながら、おかずやごはんを大量に作って冷凍したりした。

「急いで家中の水をためて。」  
と母が言った。  
「わかった。」  
と家族それぞれ思い思いの場所に散らばる。  
ほんの数分前まで私たちは平凡な日曜日の夕方をのんびりと過ごしていた。ふいに友人達から連絡がきた。

「断水になるみたいだから、水をためておいたほうがいいよ。」  
という内容だった。急いでテレビをつけると紀ノ川にかけられた水道橋が崩落した映像が映し出されていた。

翌日、蛇口をひねると、水はチョロチョロと少なくなっていて、ツンと薬のような匂いがして、これからは、蛇口の水が使えないことを知った。顔を洗うとき、溜めた水を少し汲んで洗った。朝ごはんは、洗いが物が出ないように紙皿にラップをかけたものにごはんを入れて割り箸で食べた。トイレはためた水で流した。対岸

にある学校では蛇口をひねると水が出たので私は不思議な気持ちになった。帰宅すると、また水が使えない世界。

お風呂は沸かせないので水で洗ったら冷たくて震えた。次の日からは夕方高速に乗って祖母の家に行き、お風呂に入らせてもらい、ポリタンクで水を入れてもらうことになった。母はペットボトルの水を買いに行っても売っていなかったと話していた。断水当日に水をインターネットで注文したが、注文が殺到していたようで断水が終わるまで届くことがなかった。そんな中、友人が遠くから水を届けてくれたり、近所の小学校に給水車が来てくれたり、井戸水を自由にくませてくれるお家があったり、沢山の優しい気持ちにも感謝しながら過ごした。この水道橋崩落は、全国ニュースでもとりあげられていた。私は、毎日「早く終わらないかなあ。」と思っていた。ところがそんな苦しい生活が一週間続いた。

「今日から水が出ます。」という放送が流れて父が蛇口をひねったとき、濁った水が勢いよくとびだした。

「蛇口をひねると水が出る」そんな普通だと思っていたことがどんなに待ち遠しかったか……。水が濁らなくなってから、カップいっぱいに入った水を一気に喉へ流し込んだ。その時に飲んだ水は、今までで一番おいしくてあたたかい味がした。私はほっ

と胸をなで下ろした。そして私が飲んだこの一杯の水が届くまでたくさんの方々が昼夜を問わず働いて努力してくれたおかげであることを改めて考えた。工事をして、橋の上に水道管を設置してくれた方々。浄水場で水をきれいにする為に働いてくれる方々。今まであたり前にあると思っていたことは、決してあたり前でなかったことに気づかされて、感謝の気持ちでいっぱいになった。この気持ちを忘れずに水を大切に使うていきたいと思った。

## 水の恵みを知る

和歌山県立向陽中学校 二年

うちかわ

りり

「わあ、水の中に虹ができてる。」小学三年生の夏、私が家の外庭で水やりをしていた時のこと。水が生み出す色鮮やかな虹を目の当たりにして思わず声を上げる。夏の暑い日差しに照らされて、水は一段と光り輝いていた。

私の祖母は毎年、色々な野菜や果物を育てている。祖母の口癖は「もちろん水は人間にとって大切だけど、植物にとつてもかけがえのないものなんだよ。」というもので、私はこの言葉の意味をあまり深く考えていなかった。けれど私は、とにかく水は生命を育む素晴らしいものだと思つた。

ある夏の暑い日、家においても手持無沙汰だったので、折角なら庭で水やりをしようと外に出た。すると、祖母が先に水やりをしていた。家の庭では、ミニトマト、オクラ、ネギ、エンドウ、イチゴなど色々育てているのだが、毎日丁寧に水をやっているお陰で、植物はすくすく成長していった。やがて、育てていたほとんどの野菜たちが実り、たくさんのおぼみをつけた。あれほど小さかった種が立派な実やつぼみをつけたのだ。私は改めて水の大切さについて考えさせられた。

その日から長い年月が経ち、私は中学生になった。入学後、私は環境の授業で水について詳しく教わった。内容は、「水について、どれだけ知ってあるか」というもので、水を一滴も飲まなければ、たった四、五日しかもたないのに対し、水分と睡眠をしっかりとつていけば、二、三週間ほど生きていられるという。また、体内の水分の二十パーセントを失うと死んでしまうそう。この授業で、水は私たちの生活に欠かせない存在だということを知った。

これをきっかけに、私はより水について考えるようになった。人間だけでなく、人間以外の生態系も同様に、水は欠かせないものであり、誰もが必要としているものでもある。だが、私たちは、生きていくのに水を利用するのと引き換えに、生活排水などとして、汚れた水を流しているのだ。私たちが汚した以上、今後水を利用するともに、守っていかねばならない。その責任は私たち人間にあり、未来の環境問題は一人一人の努力に懸かっていると私は思う。汚れた水を「魚が住める程度の水」に戻すためにはどれだけの水が必要なのだろうか。また、限られた水資源を守っていくために私たちに何ができるのだろうか。

一つ目の疑問について、例として牛乳を挙げる。牛乳百ミリリットルであれば綺麗にするために千五百ミリリットルの水が必要だということ。聞いてますます水が必要とされていることを理解した。

二つ目の疑問について、「二人一人が取り組めるもの」とすると、節水が最も効果的だと考えている。例えば、風呂の残り湯を洗濯用水に再利用することや、食器やフライパンの油汚れを新聞紙やキッチンペーパーで落としてから水洗いをするなどである。これらは、私の家でも取り組んでいて、たった一工夫で大量の水の無駄を削減できる。是非みんなに取り組んでもらいたい。

現在世界的に深刻化している環境問題の一つに、海洋汚染がある。人間の手によって汚染された水を海に流し、その挙げ句に海洋生物たちのすみかや生態系のバランスを壊しているのである。プラスチックごみは中でも特に問題となっており、小さくなることも、消えずに存在し続け、それらを誤って食べてしまった海洋生物が死に至るということがあるのだ。プラスチックごみは生態系自体をも壊してしまうのである。海洋汚染防止のために世界中で様々な対策が行われているが、それだけでなく、一人一人が取り組むことが大切だ。綺麗な水を世界中の人に供給するためには、水の恵みに感謝し、海洋汚染の現状を知ることが大切だと思う。

## 水と生きる

開智中学校 一年

奥村 侑誠 おくむら ゆうせい

僕の家は奈良県から和歌山県まで流れる紀ノ川の近くで祖父母が農業を営んでいる。紀ノ川の温暖な気候に恵まれ、桃とバラを栽培している。桃栽培は一年に一度の収穫だがバラ栽培は一年を通しての収穫になる。おいしい桃を作り、出荷し、店頭に並ぶ。その桃を消費者の人達が買い求めてくれる。おいしいと喜んでくれる笑顔に農作業の疲れも飛んで行くと祖父母が話していた。バラ栽培も同様で、毎日の手間暇かけた世話が花の開花につながっていく。しかし世話をするだけでは、植物は育たない。何よりも大切なのは水と太陽だ。桃栽培で言うと、花が咲く頃に雨の日が長く続くと、受粉がうまくいかず、実のつきが悪くなったり、変形の実が多くなってしまう。また、反対に晴天の日が続くと着果は良いが実が大きく育たないそうだ。適度な雨、適度な日光と温度が農業に大きく左右するという事が分かる。雨が降り続くということは自然の事なのでどうすることもできないが、晴天が続く場合に備えて、僕の家の周りの畑では、井戸を掘り、ポンプで地下水を作物に送るようにしている。バラ栽培においてもそうだ。水栽培をしている為、水は不可欠なものだ。水が無ければ、液肥が送れなくなり、バラの木自体が枯れてしまうのである。数十年前に、夏、雨が降らなかつた為、水不足になり四国地方のバラ栽培農家に多くの被害が出たことがあつたと祖父が話をしてくれた。このように、植物が生きていく上でどれだけ大切なものなのか分かる。それは植物だけではない。動物にしても人間にとつても、水はなくてはならない物だ。

昨年、和歌山市で六十谷水管橋の一部が崩落するという事故があつた。これにより紀ノ川以北地域約六万戸で断水があつた。僕はニュースで知っ

たが、水が出ないという生活を経験したことがなく、漠然とテレビを見ていたように思う。しかし、叔父一家が断水のため、僕の家に一週間ほど滞在した。叔父一家が帰ってきて急に起こつた事故だつたそうだ。そして、毎日の当たり前前の生活ができなく、生活が一変したと話す姿に事の大きさを痛感した。僕は一日の生活の流れを考えて、起床する、お風呂に入る、洗濯をする、全てが水に通じている。叔父のように帰る家がある人は良いが、その場に居て生活を続けていくことの大変さは想像を絶した。日本は水に恵まれている。しかし世界を見わたせば水道のない国もある。何キロと離れた所に水を汲みに行く事、その水が綺麗でなくとも命を繋ぐために汲んで行かなければならないという現実があるということも絶対に忘れてはならない。人間が衛生的に暮らすためには最低でも一日で約二十リットルの水が必要と言われているが、一日十リットル以下という国が約二十カ国もあるそうだ。しかし、水が少ないからと言って作物を育てなければならぬ。そこで限られている水をどのように効率的に使うかということが大きな課題である。そこで例えばイスラエルでは農業生産では三十年で約五倍に成長したというが水使用量は増えていない。これを可能にした方法は点滴灌漑という技術で限られた水を作物に与えることができるらしい。点滴灌漑とは簡単に言うと灌漑水を点滴するようにする方法である。

近年、温暖化により集中豪雨や大型台風といった異常気象が年々と増えてきているように感じる。水は時に姿を変え、僕たちに襲いかかり、多くの悲しみを生み、毎日の生活を流してしまう。反面、プールや海水浴といった僕たちに安らぎを与える物でもある。水はいろいろな顔を持っているように思う。僕の生活をする場所は川や地下水にも恵まれ生活のしやすい所だ。だからと言って無駄に水を使うのではなく、節水を忘れず水を大切にしていきたいと思う。水と共に生きるために。

## 池の写真

和歌山県立向陽中学校

二年

小谷 こたに咲貴 さき

私は毎日池の写真を撮っている。私が毎日使っている通学路には、特別大きい訳ではないが、とても綺麗な池がある。夏は少し涼しく感じられるような気がして、冬は反射する光が綺麗で、昨年の五月頃から写真を撮り始めた。今では二百枚近くの写真がたまっている。

私が住んでいる地域には、たくさんのため池がある。六年間通った小学校の名前に「池」という字が入るほどだ。なんと五十平方キロメートル程の町内に八十個以上の池があるそうである。しかし、その池の多くにはペットボトルや空き缶が捨てられている。私は、ポイ捨てがしてはいけない事なのは知っていたが、それが何故なのかは知らなかったから、調べることにした。分かったのは、ごみによる影響はとても大きいという事だ。例として鳥や魚が誤食してしまう可能性がある事が挙げられる。ニュースなどではウミガメがポリ袋を食べてしまい、死んでしまったという、海洋ごみの問題をよく見るが、池や川も同じなのだ。他にもマイクロプラスチックや害虫、悪臭の発生など、様々な影響が出てきてしまう。また、管理をする上での問題もあるそうだ。ため池は常に水が流れているのではなく、水を流す必要があるときだけ水門が開くようになっていて。その水門に捨てられたごみが堆積してしまい、故障の原因になってしまう。

私が小学五年生の時、大畑才蔵という、江戸時代、紀州藩の役人として大規模な灌漑工事を行った人物について調べる機会があった。その時に学んだのが「小田井用水」という物だ。和歌山県と奈良県を流れる紀の川の北部の農業にとっても役立つていた。その理由は紀の川の北部は徐々に標高が高くなっているため、稲作に必要な水が足りないからだ。農業には、米

はとくに水分が大切だと聞く。もしその水が汚くなってしまっていたら、様々な問題が発生するだろう。用水路などに住んでいた植物は移動することもできず枯れることになるし、動物も場合によっては死ぬことになってしまう。

一口に水といっても様々な水がある。人間が飲むための水、農作物を育てるための水、雨や雪もそうだろう。普段はこの水が全てを繋がっている意識することは少ない。しかし意識してみると、水を大切にできるのではないだろうか。ポイ捨ても洗剤の使い過ぎも一人なら、環境への影響はほとんど無いかもしれない。それは一人の場合だからその話であって、全国の人々が、世界中の人々が一斉に行うと、想像できないほど大きな被害が出てしまう。そうすれば、美しい景色も、健康に何の害もない農作物もあつという間に消えていくだろう。だから私は、環境問題は自分だけなら、一人くらい大丈夫という事は言えないと思っている。

世界にある水の量には限界がある。汚してしまった水を流せば、新しい綺麗な水が出てくるという訳ではない。だから海だけに注目するのではなく、身近にある川や池にも注目してみてほしい。理由は何でもいいと思う。用水路に住んでいる動植物を残したいからでも、ただ環境を守りたいからというものでも良いと思う。私はいつもの綺麗な池の写真を撮り続けたいから、水を大切にしていきたいと思う。

## バーチャルウォーターと私たちの生活

和歌山県立田辺中学校 三年

辻岡 慈月

あなたはバーチャルウォーターという言葉を知っているだろうか。

バーチャルは仮想という意味で用いられているため、「仮想水」とも言い換えることができる。バーチャルウォーターとは、食料を輸入している国において、もしその輸入食料を生産するとしたら、どの程度の水が必要かを推定したものだ。水資源が不足している国々の多くは、生産に多量の水が必要な食料を輸入に頼っている。私たちが住む日本はどうであろうか。

食料自給率が低い日本では、食料の供給の多くを輸入に頼っており、その量およそ八十兆リットル。つまり、水資源が比較的豊富であるにもかかわらず大量のバーチャルウォーターを輸入、食料を得るために他国の水資源を利用していていることになる。特に、日本が輸入している食料は砂漠の多い国や、水資源が貴重である国からきていることも多く、そのような国から輸入を続けることは生産国の人々の生活の悪化にもつながる。だから、「こんなに水が使われているんだ」と驚くだけでなく、バーチャルウォーターの考えを通して世界の水資源の問題を理解するよう、意識していくことが大切だと感じた。

私たちの身の回りにある、あらゆるものに関係するバーチャルウォーター。この視点に立って考えると世界で起こっている水資源に関する問題が身近に感じられてくる。人間が使える地球上の水は、地球全体の約0.01パーセントだとされる。しかし、淡水のうち七割は氷河が占め、そのほかに汚染された水や物理的に使用不可な水もあり、人間が実際に使用できる淡水の量はごくわずかだ。しかも、こうした淡水は偏在しており、水資源の豊かな国と乏しい国がある。こうした環境下、水不足の基本的な原因は、

人口増加による食糧増産や水使用の増加、産業の発展による水資源の汚染や枯渇、水資源の地理的偏在もあるとされているが、気候変動も水不足に大きな影響を与えるものとなっている。

私たち日本人がバーチャルウォーターを減らすために必要なことはなにか。それは主に二つある。一つ目は、食生活・習慣を見直すことだ。日本でも肉を中心とした食生活は広まりつつあるが、牛・豚などの畜産物は生産のために穀物や野菜よりもはるかに多くの水を使う。肉中心の生活を変革していくことで、絶対的な水の量を減らすことが可能になる。二つ目は、世界的な水不足の偏在を和らげるために、地元産品の地産地消をすることだ。輸入を行うことは、他国に知らず知らずのうちに押し付けていた水資源と水不足のリスクを、自国が持つことで水資源の限界を常に身にかけておくことが可能だ。特に日本では国内で賄うことのできる水資源量や使用許容量を超えて日々水を使い続けているため、「今後社会を持続させていく」という観点では必要不可欠な取り組みといえる。

このように、バーチャルウォーターを通じて改めて、日本という水の豊かな国で暮らす私たちも、実は他国の水資源に支えられて、生活できているのだなと感じた。だからこそ、一人一人が無理のない範囲でできることから取り組み、その輪を広げていくことが大切だと思った。

## 当たり前前に水がある幸せ

和歌山信愛中学校 二年

辻本 葵 つじもと あおい

水。それは、生活する上でとても身近にあるものだ。手を洗ったり、料理に使ったり……。トイレで水を流すことも当たり前に行っている。だから、普段からあまり意識して水の大切さやありがたさについて考えることはなかった。けれども、今回水について考えることになって、自分が一日の生活でどれくらい水を使っているのが気になり、調べてみた。

朝、身じたくをするときに使う水を、流さずにバケツに貯めてみた。すると、約四・五リットル使っていることが分かった。夜、お風呂に入るときも表示される水量を見て、七十九リットルも使っていることを知った。

インターネットでも調べてみると、家庭で一人が一日に使う水の量が平均二百四十リットルだということも分かった。生きていくのに、毎日こんなにかくさんの水が欠かせないのかと驚いてしまった。

日本では、毎日透明できれいな水が出て当たり前だが、きれいな水が出ることが当たり前ではない国もあるのではないかと思った。そこで私は、カンボジアという国の水の環境について調べてみた。

今回、カンボジアという国を選んだのは理由がある。それは、私が所属している部活だ。この部活は、カンボジアを支援するという活動をしており、先輩方が中心になって、カンボジアに住んでいる子ども達やシスターが困っていることを課題にして、話し合いをしたり実際に交流したりしている。この部に入部してから、カンボジアという国にとっても興味を持った。だから、水環境についても知りたくなった。

実際に調べてみると、カンボジアでは約三百八十万人が安全な水を飲むことができていないらしい。特に農村部では安全な水を飲める割合が低下

しており、そこにいる子ども達はいつ下痢に襲われてもおかしくない状況で生活しているという。飲み水だけではなく、約十人のうち六人が適切なトイレを使えないと書かれていた。

そんな中、安全で清潔な水を利用できるように活動しているウォータージェットという団体を知った。この団体は、一九八一年にイギリスで設立され、約四十年間にわたって、給水設備やトイレの設置を行い、その技術がコミュニティに根付くようにしている。

カンボジアの首都や発展した町では、水の設備や環境が整ってきているところもあるが、国内どこでもではない。そこで、人々は毎日水をくみに行く。しかし、水をくむのにはたくさん時間と体力が必要であり、とてもしんどい大変だ。

それに比べて日本では、蛇口をひねればいつでも、全国どこへ行っても透明な水が出る。それに、その水を飲んでもお腹をこわすことはない。私達にとっては、それが当たり前だ。でもそれが、どんなにすごいことか、どんなに優れた技術か、ということに気づかされた。だから、これからも感謝して水を使うこと、そして、この当たり前前は幸せだということも忘れない。

当たり前前にきれいで安全な水が出る幸せを、カンボジアの人々にも感じてもらいたいと強く思った。日本にとってはもう達成できている、SDGsの十七の目標の一つ「安全な水とトイレを世界中に」は、まだカンボジアや他の国々では達成されていない。今、私には、直接現地の人達にできることはないかもしれないが、日々、感謝して使うことが、きっと今私にできることだ。これからも、水という限りある資源を大切に使っていきたい。

私が感じているこの幸せが、一日でも早く、どの国でもどの場所でも当たり前になることを願っている。



## 美味しいをつくるために

和歌山県立向陽中学校 二年

いわはし 岩橋

あやな 郁奈

稲作をするにはきれいな水が必要だと思う。きれいな水は稲作にたくさんの恵みをもたらしてくれる。しかし、きれいな水を作るためには一人一人の協力が必要だと思う。たった一人で頑張っても何も結果が変わらないからである。一人がきれいな水を生み出す自然を大切にしてみんなの協力が無いと無駄になってしまう。こう思い始めたのは小学五年生の頃だった。

祖父母は農業を長年経営していて夏から秋にかけて稲作をしている。そんな祖父母の家の周りには大きな山があり、山から一筋の大きな川が流れている。その大きな川にはコイやカニ、ドジョウなどたくさん種類の魚がいる。水の流れにさからって悠々と魚は泳いでいる。しかし、私が生まれる前はまだまだそうでもなかったようだ。

小学五年生の頃、私は祖父母の田植えの手伝いに足を運んでいた。田んぼ一面に広がるきれいな水、水面にはアメンボが泳いでいた。田んぼ一面に入れられた川の水はとても透き通っていてとても心に残っていた。そこで祖父が

「昔と比べてきれいな水になったな。」

と言った。私はその言葉に疑問を感じた。昔は汚かったのかと。祖父に尋ねると、

「昔は薄汚れた水が田んぼに入ってきて、コメも今より苦かったわ。」  
 と言われ、私はびっくりした。そんなに水が大事だとは思わなかったからだ。続けざまに祖母も

「昔は工場から出てくる汚染水で川が汚かったな。」

と言った。私はその時工場から川に汚染水が流れていたことを知った。今はこんなきれいな昔はそんなに汚れていたんだと驚いた。私はきれいな水を作るのが難しいことだと知った。なぜそんなに汚かった水がここまできれいになったのか、私は疑問に思い、祖父に聞いた。祖父は地域の一人一人の協力が大事と言った。どうということなのかと聞くと、川にゴミを捨てないようにしたり、自然を大切にしたりすることが大事と言った。私はきれいな水を生み出してくれる自然まで大切にすることが大事だと聞いて驚いた。祖父は自治会で話し合い、月に一回川の清掃をすることにしたらと言っていた。私はこのことからたたくさんのことに気づいた。きれいな水を守っていくのは私たちなのだということだ。私たちが守らないと川は汚れ美味しい米が作れなくなってしまう。美味しい米が作れないと消費者を笑顔にすることはできない。きれいな水を守る理由にはたたくさんの重要なことがあるんだ。そう気づいた。私はこのことから日々水を大切にしようと思った。きれいな水を保つことで稲はよく育つし美味しくなるらしいので少しでもきれいな水を保てるよう努力したいと思った。毎日ほんの少し心がけることで水を大切にすることができているのではないだろうか。私たちが生きていく上で水は絶対に必要なものなので水をきれいに保てるようにしたい。これからも水の大切さを感じながら行動していきたい。

## 清水大師

開智中学校 一年

おおしま 大島

なおき 直樹

僕はメダカを飼っている。数ヶ月に一度、メダカの鉢をきれいにし、水を交換する。交換する水は一般的に、水道水にカルキぬきの薬を入れた水や、汲み置きの水を使うのだろう。僕の家近くには清水が湧き出ている所がある。その水は地下水なので、当然カルキも入っていない。なので僕の家ではその清水をメダカの水に使っている。その水を汲む時、祖母や母は小銭を必ず持って行き、横に祀られているお堂にお賽銭を入れてから水を汲む。

小学校の社会科見学でこの清水の所に行き、調べ学習をしたのだが、この清水は次のようにして生まれたらしい。

和泉の国を通っていた旅するお坊さんやお婆ちゃんにお湯を一杯欲しいと言ったところお婆ちゃんは水を汲みに行ったきりなかなか帰ってこなかった。あまりに時間がかかったので、聞いてみると、とても遠い所にまで水を汲みに行っていたとのこと。このことに感銘したお坊さんは、ここに井戸を掘りなさいと言って、立ち去った。そして掘ってみると水が湧き上がり、村人は喜んだ。このお坊さんは後に「弘法大師さま」と分かった。今でも水を汲みに訪れる人は多く、地域では「清水のお大師さん」と呼ばれ、親しまれている。

南泉州は昔「和泉の国」と呼ばれ、名水の湧き出る場所は数多く存在しているが、その中でも海岸近くの地中から出る真水というのは珍しい。波打ち際まで数十メートルの位置にあるのだが、塩分を含まない清水が湧き出ているのは不思議で貴重である。

「なるほど」

と僕は納得した。清水を汲みに行く度にどうしてお賽銭を入れるのだろうかと思っていた。だが、その時に気づいた。弘法大師の教えで簡単に水を汲むことができることに對する感謝の気持ちを、お賽銭という形で表現していたのだ。

湧き水だから、次から次に湧いて出てくるものだと思っていた。今回、色々調べると、付近の他の井戸は、アスファルト化や宅地化により水が枯れたり埋没してしまったりしていることが分かった。今も豊富に湧き出ている清水ではあるが、地域の方々が手入れをして、守っているおかげで成っている清水だと思った。

先日、中学生にもなったので、

「一人でメダカの水を汲んでくる。」

と母に言った。その後母は、

「お賽銭、忘れないように。」

と言ってくれたらしいが僕は覚えていない。結局お賽銭は忘れて、水を集みに行ってしまった。着いてから気付いたが、もうおそい。

「どうしようか。」

そう思ったが、今回は別の形で感謝の気持ちを伝えようとした。落ち葉拾いだ。きれいに片付いたあと、心まできれいになった気がした。海近くの貴重な井戸水を守っている地域の方々と、この場所への感謝を落ち葉拾いという形で伝えられた気がした。

## 美しい水と生きていく

和歌山県立向陽中学校 二年

かなた 金田

ゆな 悠那

「自然の中で輝いている水が好きだ。」

そう感じ始めたのは、小学四年生の頃だった。元々、山登りが好きだった父と私はその日も山登りに出かけていた。その山は、少し足を踏み入れただけでも分かるほど、他の山とは違う涼しさがあつた。いざ登り始めると「サラサラ」と真横を流れる川。その川はどこまでも透き通っていた。いつものまにか、その美しさに見とれてしまっていたほどだった。しばらくして、もう一度歩き始めると、あることに気がつく。いつものように暑くないということ。いつもは、ムシムシしてすぐに汗だくになってしまうのに、まだ少ししか汗をかいていないではないか。と疑問に思った私は、いつもの山と何が違うのかを考えてみた。まず、自分の服について考えたが、いつもと同じような格好だった。そうなるに残りは一つ「環境」しかない。いつも登る山は、周りに川などなく、とても日に照らされている。しかし、この山は、近くに水が流れており、大きい岩などもあつて陰にまつている。この周りを流れる水のおかげで、あまり汗をかかずに登れる。この川の水を触ってみると、とても冷たくて、タオルを水にひたすと保冷剤がわりになり、とても冷たくて気持ちよかつた。

また、少し登って行くと、「ザーザー」と力強く流れる滝があつた。その滝は、先程の真横を流れる川とは違う輝きがあつた。先程の川とは比べものにならない水圧だった。私達は、その滝から先程の川まで下りていく間にある水流があまり強くないところをロープを使って渡つた。水流が強くないとは言っても、滝と川とをつなぐところなので水の量は多く、この日は、私の腰くらいの高さまであつた。これくらいの水の量になると流され

そうになる。そんなところが自然のすごいところであり、怖いところだと感じた。そして、私達が渡り終えると、目の前には苔の生えた岩が階段のようになっていた。歩き始めるとすべりそうになって危険だったが、その岩達は、絵になるくらい美しかった。私は、この山登りを通して、自然の水の美しさと怖さを知った気がした。

この日から、自然の水の美しさに心をうばわれた私は、川や滝などについて調べてみた。調べていくと、大雨や洪水、土砂災害を防ぐために、様々な対策が行われていることが分かつた。壊してしまうのではなく、工夫していくことが大切だと感じた。生物が生きていく上で、一番大切だといっても過言ではない水。そんな水も量が限られていることも知つた。私は、山登りの時に感じた水の美しさ、怖さ、生物を育てていく偉大さを他の人達にも感じてほしいと思う。感じてもらうには、この美しい水を守つていかなければいけない。そのために、自分ができる身近なことから積み重ねていこうと思う。例えば、こまめな節水を心がけたり、お風呂の水を再利用したりするなどの簡単なことから始めればよい。このような活動を一人一人がすることで、ずっときれいな水でいられるのではないかと考える。だから、私からみんなに広げていこうと思う。そして、あの日のような輝く美しい水とずっと生きていきたい。

## 水の美しさを守るために

和歌山県立向陽中学校 二年

かわしま

あおい

川や海・湖・氷・雲など、水という物質は様々な形に状態を変化させ、いつも人間や他の生物の周りにある。水は人々に幸せや感動を与え、人々に苦しみや悲しみも与える。飲み水や生活用水、美しい景観などは人々に幸せや感動を与えてくれる。こういった水であればとても良いのだが、時には大雨や洪水、津波などの災害をもたらす一面もある。人々を巻き込み、亡くなる一面もある。そのような恐怖も水にはあるのだ。

僕は、小学六年生の時、和歌山県広川町にホタルを見に行つた。ホタルは、きれいな川にしか卵を産まない。川の近くには、黒闇の中にたくさん黄色い粒がピカピカしていた。

「とてもきれいだな。」

家族にホタルを見ながら言った。

「おじいちゃんが小さい頃はもつとホタルはいたけどな。」

祖父がそう言った。僕が小さい頃からホタルはほとんどの川で見ることができず、住んでいる町の中や近くにもホタルが見える場所は数ヶ所しかなかった。だから、祖父からそう教わった時はびっくりした。ホタルが昔より減っている原因に人間があると思う。ホタルは川がきれいではないと住むことができない。つまり、川がきたなくなればホタルは住めなくなってしまう。僕の住んでいる地域には、いくつもの小さな川や大きな川がある。しかし、これらの川にゴミが落ちていないのを見たことがない。お菓子などの入っていたプラスチックの袋やジュースの入っていたペットボトルや缶など。川に捨てられているゴミたちがきれいな川も汚してしまおう。他にも、工場などから出た廃水が川などに捨てられたり、流れ出したりし

て水面に油が浮いているのも見たことがある。ゴミも廃水も人間によるものだ。

人間は、きれいな景色を見たりして水から感動を与えてもらっている。それなのに人間は、自らの手でその水を汚して感動を消している。このようなことが、もつと続けばホタルなどのきれいな場所にしか住めない場所にしか住めない生物は絶滅する。ホタルだけでなく、他の生物も住むことができる場所が減っていく。そうすれば、たくさん生物が地球からいなくなってしまう。そうなってほしくはない。川原のゴミ掃除をしたり、プラスチック製品をあまり使用しなかったりすればいい。工場をつぶして廃水が川に流れるのを防ぐようなことはできない。だから、ごみとなる製品を減らしたりと小さなことを積み重ねて生物を守りたい。

地球には、たくさん様々な場所に水がある。そして、その水はたくさん生物が使っている。魚などは水の中を泳ぐ。それに、その魚をねらつて鳥などの動物がえさ場や水飲み場として来る。そのような、自然界でも大切なところを人間があらして汚していく。小さな生き物が住めなくなり、それを食べる魚もえさが無く来なくなる。日本中、世界中から生き物がいなくなる。人間が食べている食品の多くは生物からできている。つまり、生物がいなくなれば人間もいなくなってしまうのだ。水はそれほど地球上の全生物にとって大切なものなのだ。これからも、ホタルのような美しい景観を守り、死んでしまう生物を減らすためには人間の努力が必要だ。ごみを減らし無くしていく。そして、生物の命、地球の未来、僕達の未来を自ら守っていくべきなのだ。

## 当たり前前を大切に

和歌山県立向陽中学校 二年

きのした 木下

えり 恵李

水は常に綺麗な姿を保ち続けている。私はそう思っていた。だが、必ずしもそうではないことを後から知る。

日本の水は比較的綺麗で、蛇口をひねると美しい雫が集まってやわらかい水が出る。だが、そんな国は決して多くはない。水道水が飲める国はたったの十五カ国だけなのだ。私は、これを知ったときとても驚いた。私は、水道水がそのまま飲めるといことは、当たり前だと思っていた。蛇口から出た水をそのまま飲めるといことは、当たり前だと思っていた。蛇口から出た水をそのまま飲んだり、それを使って野菜を洗ったりしていることは、どこかの国では当たり前ではない。私は言葉を失った。なぜこんなにも水道水をそのまま飲める国が少ないのか、私はとても気になったので、調べてみることにした。水道水をそのまま飲めない国の多くは、水道水に最近や不純物が含まれているからだそうだ。そう考えてみると日本は、その細菌や不純物を全て取り除いているということになる。日本の水道水は定期的に約200種類もある検査を行っている。また水道水は、浄水場という施設で水の汚れを取り除き、塩素で細菌などを消毒した状態で届けられる。このような工程をしてくれているおかげで私達は清潔な水を飲むことができていく。たった一滴の水は、何百人、何千人の人たちの努力の証だ。日本は小さな国というところもあり、インフラ整備を進めやすいが、それでも素晴らしい。だが、私は少し残念だと思ったことがある。こんなに素晴らしいものなのに、水を無駄遣いする人も多い。とくにポイ捨てをよく見かける。

私の家の近くに川があるのだが、その川はとても綺麗だ。私が家に帰る

途中に必ず見えるその川は、夕方になると、夕日が映ってとても綺麗だ。だが、その川にある日、ペットボトルが何本も落ちていた。私は、すごく悲しかった。私の好きな川がなくなつたみたいだった。その日の夕日は川に上手く映っていなかった。その次の日も、次の日もゴミが消えなかった。それどころか、ゴミは増えるばかりだった。でもその川は橋の下なので、ゴミを取りに行けるわけでもなかった。一週間ほどしてから、そのゴミは業者の人が回収してくれたそうだ。私達人間は、水がないと生きていけない。だが、自らその水を汚す人も少なくない。そして、知らぬ間に水を汚していたり、無駄遣いしたりしている人もいる。私も、絶対とやっていいほどしているだろう。家庭で一人が一日に使う水の量は、平均二百四リットルと言われている。これは、二リットルペットボトルで百七本分に相当する量だ。この量を毎日消費していると考えると私は少なくとも川にゴミを捨てたりしないだろう。その大事な水を汚したりはしない。でも、きっと私だけがそんなことを思っているも、何も変わらないのだろう。だが、知るといことはとても大切だと思う。学校で水のことを学んで、そこから自分でも調べてみる。そしてそれを身近な人に話す。それだけでも少しは変わると思っている。そして、身近で起こっていることを知ること大切だ。例えば、水の使用量が年々増えていることなどだ。現状を知った上で、自分では何ができるのかを考える。手を洗うとき、一分間水を出しっぱなしにしていたら約十二リットルの水が使用されることになる。だから、水をこまめに止めることが大切だ。一回あたりの洗濯に使われる水の量は、洗濯物一キログラムに対して約十リットル使われる。お風呂の残り湯を使えば、その水を節水することができる。一人一人が気をつければ大きな力になる。だから、小さなことでもいいから始めようと思う。

私が当たり前だと思っていることは、誰かにとって当たり前ではないのかもしれない。当たり前だが水を使いすぎてはいけない。この当たり前前が、いつか当たり前ではなくなる日が来るかもしれないから。

## 水との自然観に育まれて

和歌山県立向陽中学校 二年 申上くしがみ 舞まい

「水になりたい。」幼いころ、私はよくそう思った。それは、地球全体を駆け巡る水の存在に尊さと憧れを抱いたからなのだと思う。私は度々、両親に連れられて数多くの自然に触れさせてもらった。何処へいっても、真っ先に目に映るのは青く澄んだ水で、見つめていると中に吸い込まれそうな気さえした。そんな水に触れると、悲しいようなうれいような何とも言えない心地よい気分になるのだった。

三年前、家族で奈良県にある「水源地の森」を訪れた。そこでは清らかな水の恩恵を受け、森の生命が育まれていた。色取りどりの命を見ていると、水というものが持つ力を大きく感じ、それを目の当たりにし、自分が急に小さく思えて、水を少し恐ろしく感じたことを覚えている。また、ある時私は川で足を滑らせて足の届かない所へと落ちたことがある。あの時水中で目にした泡は音符のようで、水は美しい音楽を奏でているのでは、そう思った。水というものは人によって感じ方が違うのかもしれないが、私はこれからの体験から、時には人の命を奪い、また生命を芽吹かせて行くといったたくさんの感情に満ちあふれた、色彩豊かな生き物ではないかと考えた。もしこの感情が一つでも欠けたとしたら、私達の生活は成り立たないだろう。

今まさにその一つが欠けようとしているのではないか。そう思える出来事が近年多々起こっている。雨が通常以上に降り、台風の勢力が増して川が氾濫する一方で、何日も雨が降らず、祖母の野菜が心配で、窓辺に立てる坊主を吊るして雨乞いした程だった。道端で干からびている生き物を見ると心が痛んだ。まぎれもなく、この環境を作り出したのは人間である。

欲を追い求め、超えてはいけな一線を通り越したような気さえする。自分たちの手で罪もない他の生き物を殺しているのだと、生き物好きの私には受け入れがたい事実だった。このまま環境が破壊され続けければ、教科書で見たような、水不足の地域のようになるだろうと鳥肌が立った。水の怒りも買い続けるだろうと。

昔の人々は、水を大切にし、神としてあがめていた。水不足になれば人柱を建て多くの人が犠牲となった。そうしてまで水を守ったのだ。今よりも水のありがたさが理解されていたと納得した。現代人と比べると、何だか昔の人々は一つになり水を守っていた、という相違点を発見した。私達も一つになれば良いのだ。一人一人の力は弱いが集まると、ダイヤモンドよりも強い光を放つ。その一人になれるように、今日から身の回りの節水に努めていこうと思う。そして、水への感謝も忘れずに。

水蒸気、雲、雨など、水は様々な感情を持つ。私達は水に包まれて生きているのである。いつか見た、あの、青く澄んだ水が世界中に行き渡り、次世代に引き継がれていくことを私は願っている。小さい頃に見た自然が、今以上に生長してほしくとも思う。今、目の前にある水に宿る命は無限大だ。それを心に留めつつ、日頃の生活の中でもっと水について考えてみようと思う。もちろん家族全員でだ。今、この瞬間も何とという水が世界中で使われているだろう。だから伝えたい。環境の宝物である水がもたらす恵みに、私達は感謝して生きていかなければならないことを。

## 水を大切に

和歌山県立向陽中学校 二年

津田

若奈

コンビニで会計を待っていると、ふと「ユニセフ募金」という文字が書かれた募金箱が目に入った。なんとなく気になって中をのぞいてみると、一円、五円、百円、といったお金がたくさん入っていた。中には千円札も入れられていた。その時の私は、「どうして知らない人のお金を使うのだろうか」と、疑問に思っていた。

それから数ヶ月たったある日、私は児童会として「ユニセフ募金」に参加することになった。これまでの私は募金をすることがなく、そもそも関心を持ったこともなかった。私たち児童会は募金をすることの大切さについて生徒に伝えなければならぬ。そこで私は、今まで考えたこともなかった「募金」について知識をつけようと思い、「ユニセフ募金」について調べることにした。なんとなく入ったサイトを見た私は、言葉を失った。そこには、汚染された水を飲む子どもたちの姿と「世界中の子どもに安全な水を」というメッセージがあった。私はその時、普段当たり前のように使っている水が、世界には不足しているところがある、ということを知った。その事実には、胸が痛んだ。よく考えてみると、私たちの生活は水に助けられている。お風呂には毎日入ることができし、じゃ口をひねればすぐにきれいな水がでてくる。水道水を飲むことだってできる。さらに詳しく調べると、世界では安全な水を飲むことができず毎日八百人もの子どもが命を落としていくことも分かった。それを知り、私は少しでも多くの人を救ってあげたいと強く思った。それから児童会は生徒に協力を呼びかけ、募金活動に努めた。多くの生徒が参加してくれたので、募金額は例年より多く、私は達成感でいっぱいになった。

この活動を通して、普段ふれたことがなかった募金と接し、水について考える機会を得られたと思う。それに、普段当たり前のように使っている水は、ある国ではとても貴重なものであることを知り、水のありがたさについても感じるようになった。水を無駄遣いせず大切に使う、という意識をすることにもつながることができた。

現在もアフリカの多くの国では、水不足が深刻化することが懸念されている。私たちは今日もじゃ口をひねって手を洗ったり、お風呂に入ったりにしている。しかし、それが当たり前になっているように感じられる。もしも水が使えなくなってしまうと、私たちの生活はたちまち不自由になってしまいうだろう。だから、一人ひとりが水について考えるべきだと思う。それに、水を大切にすることで自分たちができることがある。募金もその一つだろう。たった一円でも、多くの人が募金することで、たくさん人の命を救うことができる。他人事のように考えて、他の人がやってくれるだろう、と思っはいけない。自分から行動することで、自分自身も成長できると思う。私は、「どうして知らない人のためにお金を使うのだろうか」と思ったことがあった。それは、金額に関係なく、行動すること自体に興味があるからだ、今私は思う。募金の他にも節水など、水を大切にすることは日常の中でもできる。私はこれからも、水を使えることにありがたみを感じ、募金や節水を積極的にしていこうと思った。今日、コンビニに行った私は、募金をした。世界中の人々が安全な水を使えるように。

## 水との向き合い方

和歌山県立向陽中学校 二年

にしがみ 西上

かなん 佳楠

ヒトは水なしでは生きられない。これは当たり前のことだ。ヒトを含む生物は、水が無くなると死んでしまう。ネコもヒツジもヒマワリも、この地球に水があるから生きることができている。そう強く実感したのは、去年の秋の出来事である。

去年の秋、紀の川の北と南の水道をつなぐ水管橋がくずれた。それが原因で和歌山市の約四割の六万戸が断水した。その日「断水になるかも。」ということを目にしたが、家の水がすっかり出ていることもあり、デマだろうと思っていた。しかしその日の夕方、水道から出る水は明らかに変わっていた。茶色く濁り、ちよろちよろとしか水が出なかった。その日に水や食料を買いに行ったが、どこに行っても水がなく、インスタント食品も少ししか無かった。幸いにも、家に水はたくさんあったので当分は大丈夫だろうということになった。次の朝にはもう水は出なくなり、その日から一週間、いつもとちがう生活を送ることになった。食事は、インスタントのものが多くなった。それは、ご飯を作れないからではなく、食器などを洗えないからだ。トイレは用を足した後、バケツに水をくみ水を流しこむ形で流した。お風呂は、断水していない川の南の地域にある、銭湯に行った。帰りの道は大渋滞で、いつもなら十分で行ける場所も一時間以上かかった。そうして一週間が経過すると、橋に仮の水道管が設置されじゃ口をひねれば水が出る、いつもの生活に戻った。

そして、断水がおわり、その時に考えられなかったことも、考えられるようになった。まずは、なにげなく使い飲んでいた水は人にとって大切なものだという事だ。人にとって大切な水は、飲み水だけでなくその他で

使う生活用水もそうだ。むしろ僕はその生活用水の方が大切だと思う。それは、人が現在使っている水の内訳を見ると生活用水の方が圧倒的に多いからだ。トイレを例にしてみよう。最新型のトイレでは一回約四リットルといわれている。一日に二リットルペットボトルを二本飲むだろうか。四リットルというのはトイレ一回であり、一日ではない。ここから、飲み水は普段の生活で使う水のうちとても少ないということが分かる。これが断水を体験して一番感じたことだ。もう一つ感じたことがある。それは、じゃ口から水が出るということが、あまりにも普通になってしまっていたことだ。断水時でも、水が出ないと分かっている、つい手を洗う時にじゃ口をひねってしまうということがたくさんあった。その時に先人の人々ががんばってつくりあげてきた水道に、何のありがたみも感じていなかったことに気がついた。それからは、じゃ口をひねり水が出ることに少しでも感謝するようにしている。

しかし、そんな大切な水も人に恐ろしい一面を見せることがある。災害だ。津波、大雨、氾濫などとなってたくさんの方の命を奪っていった。自然災害は恐ろしく、人間がとめることもできない。起こったことを想定して行動しておくことが大切だ。

水は、大切なものでさまざまなところに使われる、万能なものだ。そんな何にでもなれる水だからこそ、人に恐ろしい一面を見ることがある。これからその水とどのように関わっていくのか。一番大切なことは、節水だと思ふ。少し節水をしただけで、世界の困っている人々を救える訳ではない。しかし、それを続けることでもいつかそんな人々を救えるはずだ。また、緊急時のために水を用意することも大切だ。今回僕が体験したような水管橋の崩落による断水は、日本各地で起こりうることだ。いろいろな状況を考え、あらかじめ対策しておくべきだ。



## 私たちの生活と水

和歌山県立向陽中学校 二年 濱ノ上 絃生

はまのうえ こうせい

私たちは普段から水を大切に使用しているのでしょいか。私がこう強く思ったのは、生まれて初めて約一週間の断水を経験したからです。「水を大切にしましょう。限りある資源を大切に。」そう幾度となく言われて生活してきましたが、この時ほど思い知らされたのは初めてでした。

日本は水道インフラが整っており、水道水が飲めるのは普通のことです、いつでも蛇口をひねれば水が出てくるのが当たり前です。そのため私は今まで水が使えなくなる恐ろしさを実感できていませんでした。

人が生活するために必要な水の量は、飲料水、生活水合わせて一日二百〜三百リットルと言われています。そう言われても一体どの位の量を実際に使っているかは、正直把握できていませんでした。断水が始まると近くの小学校に給水車が二台来て、毎日二十リットルのポリタンク三つ分の水を貰いに行きました。断水が始まってすぐのご飯の後、なるべく使わないように量を減らした食器でさえ、洗うのに二十リットルのポリタンクはあつという間になくなり母は愕然としていました。いかに普段何気なく水を使っていたのかと気付きました。貰った水は本当に必要なこと以外、例えば料理や、顔を洗ったり、歯を磨いたり、そういったことに使えるように置いておかないといけないという不安感に変わりました。

生活をしていく上で、水を大量に消費することはまだまだあります。お風呂・洗濯・トイレです。お風呂は銭湯、洗濯はコインランドリーに通うことでしのぎましたが、トイレはそうはいきません。断水前にお風呂にためておいた水をバケツに汲んで流すのです。1回のトイレに流す水の量は二・五〜五リットルで約バケツ1杯分必要になります。数日でお風呂の水

はなくなってしまうました。

今回の断水は、生活に大きな不便を強いられましたが、一部分の場所のことだったので車で断水していない地域に行けばそれなりに生活できました。そして何より一週間で元の生活に戻りましたが、これがすべての地域で常に水が足りない状態になってしまうと、私たちの生活は一体どうなることでしょうか。

世界では水不足で清潔な水がないため命を落としてしまう国がまだ多くあります。世界では約八億人の人が水道のない生活をしているそうです。整備されていない水を飲むことにより病気になるたり、手洗いなど衛生管理ができず感染症が広がったりして最悪命を落としてしまう。又、水が原因で紛争が起きている。そんな状況は日本に住んでいたら遠い国のことで、どこか他人事に感じてしまいます。しかし、水の安全を掲げる日本に住んでいながら、今回のように水道管が破損したことで生活は急変するのです。安全な水が出ることは当たり前ではないのです。実際に断水を経験しなければ、私はどこかでこう思っていました。浄化施設がしっかり整備してくれているのだから、水に困ることはないだろうと。危機感があまりなかったのが正直なところなんです。実際に経験したからこそ、水の大切さを実感し、水の使い方を改めようと思いました。

地球は水の惑星といわれていますが、人が使用できる水は0.01パーセントにも満たないそうです。水には限りがあるのです。私たちができることを、行動にしていくことにより、地球の未来は変わってくると思えます。

## 水はみんなのもの

和歌山県立田辺中学校 三年

和<sup>わ</sup>田<sup>だ</sup> 温<sup>は</sup>時<sup>と</sup>

水。これは生き物が生きていくために必要不可欠なものである。これは僕たち人間も例外ではなく、料理、洗濯、掃除、トイレや風呂など様々な場面で水を使っている。人間が生きるためには、水が大量に必要なのである。

しかし、それが原因で起こる問題、いわゆる「水問題」がこの世にはたくさんある。実は人間が使用できる水は0.01パーセントなのである。水の惑星といわれる地球だが、そのほとんどが海水なのである。人間が自由に使える水が、そもそも少ないのだから、「水問題」が起きるのも当然というわけだ。

「水問題」といったときに最初に浮かんでくるのは、世界全体の水道管が十分に整備されていない点である。世界の中で水道水を飲んで問題のない国は、一五か国と言われている。これは、逆に言えば残る百八十近くの国では水道から水を飲むことができないのである。水道が通っていない国と聞くとアフリカやオセアニアなどの発展途上国を思い浮かべるかもしれない。しかし、実際はアジアやヨーロッパにも水道から水を飲むことができない地域があるということなのだ。それはSDGsにもあるように、一刻も早く解決しなければいけない問題である。水をくむため朝早くから出かけ、勉強が思うようにできない子どももいる。生きるために仕方なく飲んだ汚れた水によって、失われていく命もある。このような不平等を2030年までになくするのがSDGsの目標である。これからは、井戸を掘る方法を教えたり、募金をしたりといったボランティアの活動だけではなく、国をあげた支援が必要になってくるだろう。もちろん、日本もその国の一

員だ。

また、「水問題」といえば他にも「水質汚染」も頭に浮かんでくる。この問題の厄介なところは、人々に自分が水質汚染をしている意識がない点にある。水質汚染はゴミがポイ捨てされたり、水道に多量の洗剤が流されたりして起きる。このような行動をとった人は特に何も悪いと思っていないことがほとんどだ。その後、ポイ捨てされたゴミは川に落ちて海まで流れていたり、洗剤が直接川に流されたりして、水質汚染が起きる。もちろんすべてがこうなっているとは限らない。しかし、水質汚染が起きているのも事実だ。だからまずは、自分の普段の何気ない行動が水質汚染につながっていることを知ってもらい必要があるだろう。水質汚染による動物や人々の現状を知ってもらわなければならない。僕も、インターネットで鼻にプラスチックのゴミがつまっている亀を見たときはとてもびっくりした。きっと他の人も同じような気持ちになるだろう。まずは、これから先の海や川がどうなるかを知ってもらわなければならない、人々の行動は変わっていくだろう。

このように、現代社会には様々な「水問題」がある。SDGsにあるように、これは世界全体で取り組んでいかなければならない。2030年までにSDGsを達成できるかは誰にも分からない。しかし、分らないから取り組まないのではなく、ゴールが見えるところまで頑張っていく必要がある。「水問題」の解決には一人一人の意識改革と国同士の連携が必要だ。水は地球上みんなのものということだけは覚えておいてほしい。

## 第44回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第46回「水の週間」の行事の一環として実施された作文コンクールの概要は、次のとおりです。

### 1 応募要領

- ①テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
- ②対象・・・中学生（中学生と同じ年齢の方を含む。）
- ③原稿枚数・・・400字詰め原稿用紙4枚以内、日本語で表記された個人作品に限る。  
題名・学校名・学年・氏名（ふりがな）を記入する。
- ④あて先・・・和歌山県庁 地域政策課  
〒640-8585 和歌山市小松原通1-1  
TEL 073(441)2423
- ⑤応募期間・・・令和4年5月10日締切り
- ⑥版权等・・・○応募作文は自作の未発表のものに限る。  
○応募作品の著作権は、主催者に帰属する。  
○応募作文の返却は行わない。

### 2 応募結果

応募 学校数	応募 総数	学年別		
		1年	2年	3年
校	編	編	編	編
10	557	244	249	64

### 3 審査

和歌山県審査において、優秀賞3編、入選5編、佳作10編あわせて18編の入賞作文を決定。

(協力 和歌山市中学校国語教育研究会)

### 4 表彰

#### (1) 賞および賞品

賞	賞品
優秀賞	賞状、図書カード
入選	賞状、図書カード
佳作	賞状、図書カード

#### (2) 表彰式

優秀賞の受賞者を令和4年8月2日、和歌山県庁において表彰

# 8月1日は 水の日



水を未来へつなごう  
シャワーズも応援!



ポケットモンスター  
No.134 シャワーズ  
タイプ 炎  
くせい ちょすい



シャワーズはきれいな水辺に暮らし、  
細胞が水の分子に似ていることから  
「水の日」のイメージカラー



「水循環基本法」第10条、第11条に基づき、  
環境省が定める「水の日」は、毎年8月1日から7日までです。  
環境省 国土政策課 水循環推進課

<https://mizunohi.jp>

水の日 検索



シャワーズは環境省のイメージキャラクターです。  
水の日 水循環推進課

水循環基本法に基づき8月1日が「水の日」と定められました。8月1日から7日は「水の週間」です。